

Event 構造におけるアスペクト転換：

「たて」構文の分析*

山田昌史

神田外語大学言語科学研究センター

本論文は、「焼きたてのパン」のような動詞に接続し、修飾要素を形成する形態素「たて」について記述的一般化を試み、「たて」構文の生成メカニズムを Pustejovsky (1991)の提案する event 構造の観点から理論的検証を行う。「たて」構文が可能な述語は、有界/非有界のどちらの解釈も可能なアスペクト特性が語彙的に未指定であるアスペクト中立述語であることを観察し、「たて」構文は、形態素「たて」の複合によって、もともと中立的であった述語から有界的な性質を取りたてることで生じる構文であることを明らかにする。本論文では、event 構造における subevent の顕在化のメカニズムを提案し、アスペクト的に中立である述語は、<act>、<state>の顕在化未指定の2つの subevent を持つと仮定し、「たて」が、<state>の subevent を顕在化することで、「たて」構文が成立すると主張する。

Introduction

本論文は、動詞に複合し、名詞を修飾する要素として働く「たて」について、その複合要件について観察し、また、「たて」複合のメカニズムについて理論的検証を行うことを目的とする。

以下に示すように、「たて」は動詞に接続し、名詞句前位置に生起することで名詞の修飾要素として働く。(本論文ではこれらの名詞句を「た

*本論文は、第127回日本言語学会(於大阪市立大学)における研究発表『「たて」構文の分析：述語のアスペクト特性と event 構造からのアプローチ』を基に加筆・訂正したものである。発表の際、司会をして下さった工藤真由美先生をはじめ、コメントを下さった方々にお礼を申し上げます。また、本論文の draft に対し、長谷川信子先生、神谷昇氏、上原由美子さんに有益なコメントを頂いた。

て」構文と呼ぶ。)

- (1) a. しぼりたてのミルク
b. 焼きたてのパン¹

森田 (1995)は、「たて」構文生成可能な動詞を観察し、形態素「たて」について「決して終了した行為そのものを問題としているのではない。行為によって生ずる結果の価値を取りたてる意識なのである。だから、結果を生み出す他動詞、それも結果の価値に人為的意義を持つような動作動詞にまずつくのである (森田 (1995) : 663)」と述べている。(2b)では、壊したモノには価値が生じないので、形態素「たて」の接続はできないが、(2a)では、「作る」行為によって生じる料理には、出来上がったばかりの新鮮さであったり、温かさであったりと結果の価値に意義が見いだせるので、「たて」構文生成可能であるとされる。

- (2) a. 作りたての料理
b. *壊したての建物

また、同じ動詞であっても「たて」の接続を許す場合とそうでない場合が存在する。

- (3) a. 産みたての卵
b. *産みたてのあかちゃん

(3a)は、(時間が経って古くなったものと較べて) 「たまごの新鮮さ」

¹ 「たて」は、名詞句の修飾要素の一部としてだけでなく、以下のように、コピュラ「だ」の前位置にも出現可能である。

- (i) a. その言葉は、覚えたてだ。 (cf. 覚えたての言葉)
b. そのパンは、焼きたてだ。 (cf. 焼きたてのパン)

(i)の例から、この2つの構文には何らかの関係性があることは明らかであるが、以下のように、コピュラ「だ」の前位置に出現可能であるが、名詞の修飾要素の一部として出現できない例がある。

- (ii) a. 彼女は先生になりたてだ。
b. *なりたての先生

このことから、本論文では、名詞句の修飾要素の一部としての「たて」に焦点をあて、コピュラの前位置に出現する「たて」の現象を扱わない。

という価値が見いだせるため「たて」構文可能だが、(3b)は、人間には時の変化とともに価値の変化が見いだせず、とりわけ生まれたての赤ちゃんに重い価値を付与できないので容認されないとされる。

本論文では、森田(1995)の意味的な観点からの分析を踏襲しながらも、「たて」構文は、(4)のように対応する基体述語が存在することから、これらの基体述語と「たて」の関係を観察し、新たな一般化を提出する。

- (4) a. (花子が) ミルクをしぼる。
b. (花子が) パンを焼く。

本論文では、まず、「たて」が複合可能な動詞とはどのような述語であるのか記述的一般化を試みる(1・2節)。1・2節で導きだされた記述的一般化を基体述語のアスペクト性という観点から捉え直し、より一般性の高い意味概念から「たて」複合の事実を捉え直す(3節)。Pustejovsky (1991) の提案する event 構造の分析を採用し、「たて」複合のメカニズムを理論的に検証する(4節)。最後に本論文をまとめる(5節)。

1. 「たて」構文の統語的条件

本節では、「たて」が複合可能な動詞はどんな性質を持つものであるのか経験的事実を観察する。

前述の通り、(1)の例は、対応する(4)の述語から生成される。この際、述語の直接目的語に相当する要素が全体の名詞句の主要部名詞となっていることが分かる。この事実から、「たて」構文が可能な動詞は、内項を義務的にとる他動詞であると考えられる。(1)で観察した例の他にも、以下のような例が観察される。

- (5) a. とりたてのトマト (cf. トマトをとる。)
b. 塗りたてのベンチ (cf. ベンチを塗る。)

内項を義務的にとる動詞として Burzio (1986) 等で指摘される非対格動詞がある。非対格動詞も他動詞同様、内項を主要部として「たて」複合

名詞句が可能であることが予測される。以下の例のように、この予測は正しい。

- (6) a. 乾きたてのシャツ (cf. シャツが乾く。)
b. かたまりたてのゼリー (cf. ゼリーがかたまる。)

一方、内項を義務的にとらない非能格動詞は、「たて」複合を許さない。

- (7) a. *走りたての車
b. *笑いたての赤ちゃん

このように、形態素「たて」は、他動詞、または、非対格動詞のような内項を義務的に要求する動詞に接続可能であると言える。

また、以下のような三項述語の場合、直接目的語を名詞句の主要部とする「たて」複合名詞句は可能であるが、間接目的語を主要部とするものは、「たて」構文が生成されない。

- (8) a. 与えたてのえさ
b. *与えたての犬 (cf. 犬にえさを与えた。)
c. 教えたての単語
d. *教えたての生徒 (cf. 生徒に単語を教えた。)

さらに、以下のように対象項と場所項の交替をゆるす構文（所謂「壁塗り」交替構文）を許す述語を基体に持つものは、2つの「たて」構文が生成可能である。

- (9) a. 塗りたての壁 (cf. ペンキで壁を塗る。)
b. 塗りたてのペンキ (cf. 壁にペンキを塗る。)

このことから、「たて」複合名詞句の主要部として働く名詞は、基体述語の直接目的語であることが分かる²。では、内項を義務的に要求する

² Levin & Rappaport, Hovav (1986) では、英語の受動形容詞(adjunctive passive)は、動詞が唯一直接選択する目的語のみが受動形容詞に修飾される名詞句の主要部になることができるとの観察から、以下のような一般化を導き出している。

動詞であれば、どんな動詞でも「たて」複合が可能なのだろうか？以下の例から、必ずしもそうとは言えないことが分かる (森田(1995) 参照)。

- (10) a. *壊したてのおもちゃ (cf. おもちゃを壊す。)
b. *見たてのテレビ (cf. テレビを見る。)
c. *たたきたての肩 (cf. 肩をたたく。)
d. *沈みたてのふね (cf. ふねが沈む。)

(10a-c)は他動詞、(10d)は非対格動詞を「たて」へ複合したものであるが、どの名詞句も容認されない。これらの事実から、「たて」への複合が可能かどうかは動詞の項構造によってのみ決まるのではなく、編入する動詞の性質を詳細に観察する必要があることが分かる。次節で、金田一 (1950) や Vendler (1967) を基にした動詞の四分類に区枠される動詞群についてそれぞれ観察していく。

2. 述語のタイプの「たて」構文

前節までの観察から、「たて」構文は、動詞に「たて」が複合して連体修飾語化し、基体述語の内項をその主要部として働く名詞句であることが分かった。しかし、(10)で指摘したように、内項を持つ述語であっても、「たて」構文生成不可能な述語が存在することから、項構造における条件だけでは「たて」構文の生成メカニズムの全容が明かにならない。本節では、「たて」構文生成可能な基体述語の性質を述語のアスペクトタイプから考察していく。

まず、ある行為が意志をもって行われ、その行為の始点、終点が動作主の意図に従い定められるような出来事を表す活動動詞からみる。「読む」「書く」「見る」などが、活動動詞であるが、これらの動詞は、「たて」複合を許すものと許さないものが存在する。

(i) Sole Complement Generalization

An argument that may stand as sole NP complement to a verb can be externalized by APF (= Adjectival Passive Formation) (Levin & Rappaport, Hovav (1986): 631)

本論の観察から、(i)の一般化が「たて」複合にもあてはまると言えるが、「たて」構文と英語の受動形容詞との関係については今後の研究課題とする。

- (11) a. しぼりたてのミルク
 b. 書きたての論文
 c. とれたてのトマト
 d. 塗りたてのベンチ
- (12) a. ?*見たての映画
 b. ?*食べたてのりんご
 c. ?*読みたての小説

ここで問題となるのは、(11)と(12)の許容度の差である。(11)の「しぼる」「書く」「覚える」等の活動動詞には「たて」が複合可能で、(12)の「見る」「食べる」「読む」などの活動動詞にはそれが不可能なのは、なぜなのだろうか？その理由は、動詞が描写する出来事がなされた後、何らかの生産物が生じるか否かの違いにあると考えられる。「しぼりたて」は、「しぼる」という行為の終着にはしぼって出てきたもの（ここではミルク）が生じることになる。同様に、「書きたて」は、「書く」という行為の終着には、書かれたもの（ここでは論文）が出現する。一方、「たて」の複合を許さない「見る」「食べる」「読む」には、それらの行為の結果として生じるものがない。「見る」「読む」はある動作の継続を描写し、「食べる」は動作によって動作を被る対象（ここではリンゴ）が消費され、最終的には無くなる出来事を描写し、出来事の終着に新たな生産物の出現を予測しないばかりか、対象の消失を意味する。このような述語が描く意味の差から、「たて」の複合が可能な活動動詞は、行為の結果、新たなもの（生産物）の出現を予測できるものであると考えられる。

また、影山 (1996)が接触・打撃動詞と分類する活動動詞は、「たて」複合を許さない。

- (13) a. ?*たたきたての机
 b. ?*殴りたての相手
 c. ?*握りたての杖

この事実は、(12)の非文法性と軌を一にする。「たたく」などの行為が行われても、新たな生産物の登場が予測されない。そのため、「たて」の複合が許されない。

次に、変化動詞をみる。これらの動詞は、「たて」構文を許す。

- (14) a. 揚げたてのコロッケ
b. 温めたてのスープ
c. 炊きたてのご飯
d. 焼きたてのパン

(14)は、(11)の文法的な例とは異なり、新たな要素の出現を予測するものではなく、述語の表す出来事によって、変化主体の状態が変化することを意味する。つまり、「揚げる」行為が行われる前も後も「コロッケ」という物体は存在しているが、行為の前後ではその様態が変化している。他の例に関しても同様で、「スープ」「ご飯」「パン」は行為の前後、共に存在し、行為の行われた後、その様相を変化させていることが分かる。このような変化動詞の場合も、「たて」複合が可能である。

ここまでの観察から、「たて」への複合は、述語の描写する出来事の結果として生産物が生じたり、物質の状態が変化することを含意する述語のみ可能であると言える。

次に、ある動作の終了後、動作の影響を被る対象の状態や位置の変化を含意する達成動詞をみる。達成動詞は、以下のように「たて」複合を許容しない。

- (15) a. *壊したてのおもちゃ
b. *潰したての空き缶
c. *曲げたてのはりがね

同じ変化を含意するものであっても、(14)のような変化動詞の場合、「たて」複合が可能で、(15)のような達成動詞が不可能であることが、上記の観察から明らかになった。達成動詞も変化を含意し、例えば、(15a)では、「壊す」という行為の結果、おもちゃが「壊れる」という状態に

変化する。このことから、「たて」複合がなされてもおかしくない。しかし、(14)と異なり許容されない。(14)と(15)の文法性の所在はどこにあるのか？これらの文法性の差異は、最終的な変化の様相が述語の意味に完全に含意されているか否かの違いによるものと考えられる。達成動詞の場合、変化の最終局面が動詞に完全に含意されている。この場合、「たて」の複合が許されない。一方、(14)の変化動詞は、変化の最終局面が完全に動詞に含意されず、変化の方向性のみを含意する。この場合、「たて」への複合が可能である。このことから、変化の方向性のみを含意し、最終的な結果を含意しない述語が「たて」構文可能であると言える。これは、「たて」が、述語が描写する出来事の最終段階を切り取り、今まさにその段階が終了したことを取りたてるものであるので、完全に変化の様相を含意する動詞とは、相性が良くないと考えられる。

また、達成動詞と同様に変化の最終地点を含意し、その変化が一瞬にして起る瞬間動詞も同様に「たて」への複合が許容されない。

- (16) a. *つけたてのクーラー
b. *消したての街頭
c. *忘れたての宿題

これらも変化の様相を述語が完全に含意するので、達成動詞同様、「たて」構文が不可能である。

最後に状態動詞であるが、以下のように「たて」構文が不可能である。

- (17) a. *要りたての車
b. *できたての英語³
c. *ありたての借金

³ 述語「できる」は、(17b)のように可能を表す状態述語として使われると、「たて」への複合ができないが、変化動詞として使われると、以下のように「たて」複合が可能である。

(i) できたてのタマゴ焼き

このことから、同じ形態であってもどの動詞群に区枠されるかによって複合可否が異なることが分かる。

以上の観察から、「たて」構文を許す述語は、以下の2つのタイプの述語であると結論付けられる。

- (18) a. 述語の描写する行為の終了後になんらかの生産物が生じることがを予測する行為動詞
- b. 述語の描写する行為によって影響を受ける要素の変化の方向性のみを含意する変化動詞

(18a)は、(11)の例が示すように、行為がなされると新たに生産物が生じることがを描写する述語で、(18b)は、(14)のように、変化を被る主体の変化の方向性を示す出来事を描写する述語である。(18)の2つのタイプの動詞に共通して当てはまる特徴とは何か？次節で、これらの述語のアスペクト的特徴に注目して、(18)の記述的一般化がより高次の述語の意味的制約から導きだされることを主張する。

3. 「たて」複合と述語の有界性

(18)で導きだした一般化は、どんな意味的制約から導き出されるのだろうか。本節では、述語のアスペクト的特徴に注目し、「たて」複合可能な述語が共通にもつ意味的特徴を観察する。

まず、(18a)のタイプの述語のアスペクト的特徴を観察する。よく知られているように、述語が有界的なものである時、その述語は、「～間で」のような副詞句と共起可能であり、非有界的なものである時、「～間」のような副詞句と共起可能である。この観点から、(18a)の特徴をもつ(11)の「たて」複合が可能な述語を観察すると、以下のように、「～間で」、「～間」のどちらの副詞句も共起可能で、(直接目的語の解釈によるが)有界・非有界どちらの性質も持ちうることが分かる。

- (19) a. 1時間／1時間で ミルクをしぼった。
- b. 3日間／3日間で 論文を書いた。
- c. 1時間／1時間で トマトをとった。
- d. 1時間／1時間で ベンチを(赤く)塗った。

例えば、(19a)では、「1時間」と共起した場合、ミルクをしぼる行為が1時間行われ、ミルクをしぼる出来事が終わったことまでは含意されない。一方、「1時間で」と共起した場合、「しぼる」という動作が1時間行われ、その行為がその時間で終了したことが含意される。他の例も同様の説明が可能である。つまり、(19)の述語は、有界性に関しては、(付属する副詞句や補部に現れる目的語の定性、述語の使われるコンテキストなどによるが、)有界・非有界どちらの解釈も可能である。

同様の観察を(18b)の特徴をもつ(14)の述語に対しても行くと、興味深い事実が明らかとなる。

- (20) a. 10分間／10分間で コロッケを揚げた。
b. 10分間／10分間で スープを温めた。
c. 10分間／10分で ご飯を炊いた。
d. 2時間／2時間で パンを焼いた。

これらの例では、「～間」のような非有界的な述語が共起可能な副詞句と共起可能であることは疑いがない。この場合、それぞれの述語が記述する出来事が完了したことは含意しない。例えば、「10分間コロッケを揚げた」の場合、生の状態のコロッケを10分間、油の中に入れておいたことのみを含意し、揚げた結果、コロッケが生であってとても食べられる状態でなくてもよい。つまり、非有界的な意味を持つ「揚げる」は、その行為がその時間内、行われたことを描写する。一方、「～間で」という副詞句は、例えば、「コロッケを揚げる」という行為が10分間続き、10分間のその行為の終了後、生でないきちんと食べられる状態になったコロッケが出来上がるという意味で解釈可能であると思われる。つまり、10分間揚げる行為がなされた結果として、食べられる状態のコロッケが生じることが含意される⁴。このことから、(18b)のタイプの

⁴ 以下のように、目的語を完全な定の要素に変えると、この解釈があることが明らかになる。

- (i) a. 1時間で100個のコロッケを揚げて、お客さんに振る舞った。
b. 1時間で2000個のパンを焼いて、オープンに備えた。

述語も有界性に関して、述語自体は中立で、有界・非有界の決定は修飾要素やコンテキストにゆだねられることが考えられる。

一方、「たて」複合が不可能な述語は、アスペクト中立性を保持していない。(13)で「たて」複合不可とした述語のアスペクト的特徴を観察すると、これらの例では、全て非有界的な性質しか保持せず、また、結果状態を述語の特質として義務的に含意する(15)の述語は、有界的な性質しか示さない。

- (21) a. 5分間／*5分間で 肩をたたいた。
b. 5分間／*5分間で 相手を殴った。
c. 5分間／*5分間で 杖を握った。
- (22) a. 10分間で／*10分間 おもちゃを壊した。
b. 10分間で／*10分間 缶を潰した。
c. 1分間で／*1分間 針金を曲げた。

これらの文法性の対比から、(18)で挙げた「たて」複合が可能なタイプの述語は、述語自体は、アスペクト的に中立であるという点で共通性が見られ、述語のアスペクト性というより高次の意味概念から「たて」複合の可否が決定されると言える。

では、「たて」という形態素が述語に付属し、名詞前位置への修飾要素になるとときにはアスペクトに関してどのようなことが起っているのだろうか。「たて」は述語が描写する出来事の最終段階を切り取り、今まさにその段階が終了したことを取り立てるのが形態素である。「たて」複合により、中立的であった述語から、有界的な性質を取りたて、さらに、その結果によって生じるものに焦点を当てていると考えられる。

4. 分析

これまでの議論から、形態素「たて」は、有界性が中立な述語に付属し、述語の記述する出来事の段階的な出来事の一部を取りたて、その段階におけるその段階の終着点（結果）を明らかにする表現であることが分かった。

本節では、「たて」への複合が語彙部門におけるプロセスであると仮定し、Pustejovsky (1991) の提案する event 構造の分析を採用し、また、この分析をさらに押し進める Grimshaw (1993), Grimshaw and Vikner (1993), Brisson (1994) 等の分析などの分析を考慮しながら、「たて」複合の可否を決定する語彙的メカニズムを明らかにする。

4.1 英語の目的語省略

前節で観察した「たて」複合の事実と同様にアスペクトが中立である述語が、ある状況においては、特定のアスペクト的特徴しか示さない例がある。以下のように、本来、(生起する目的語の種類に影響を受けるが) 有界・非有界の両方のアスペクト的特徴を持ちうる write のような動詞は、述語が activity (非有界) の特性を示す時のみ、目的語が省略可能で、accomplishment (有界) の特性を示すときには不可能であることが知られている。

- (23) a. She wrote (letters) for an hour.
b. She wrote *(a letter) in an hour.
c. She drew (pictures) for an hour.
d. She drew *(a picture) in an hour⁵. (Brisson (1994): 90-91)

一方、melt のような accomplishment の述語は以下の例が示すように目的語省略が不可である。

- (24) a. studies (linguistics).
b. *The heat melted. (Causative reading)

Grimshaw (1993)は、(23)のような目的語省略の文法性の違いを語彙に内在する概念構造(conceptual structure)に指定される項の種類の違いであると見做す。以下のように、write、melt の語彙構造を仮定するが、二項述語

⁵ Brisson (1994)では、write タイプの動詞とは異なり、有界的な述語であっても目的語の省略が可能である sweep のような動詞があることを指摘している。

- (i) a. Jack sweep for an hour.
b. Jack sweep in an hour.

である2つの動詞は、項構造には差がないが、投射される event 構造が異なる。

- (25) a. write b. melt
 (x (y)) (x, (y))
 x acts x cause y to change state (Grimshaw (1993): 6)

Grimshaw は、項構造に現れた項で、事象構造にも義務的に投射されなければならない項 'structure argument' と、項構造内にのみ義務的に生起し、事象構造には義務的に投射されなくてもよい項 'content argument' の2つの区別があると主張する。つまり、write の場合、項構造においては、(x, y) と2つの項が必要であるが、x の項は、structure argument であるため、語彙・統語の両方の構造に義務的に現れるが、y 項は、content argument であるため、項構造では指定されるが、事象構造に義務的に反映されなくてもよい。このため、(23a) や (23c) のような目的語の省略された文が生じることが予測される。一方、melt の場合は、x, y 共に語彙・統語の両面に義務的に反映される structure argument であるため、目的語の y 項の省略は不可能である。

Grimshaw (1993) では、語彙構造に規定される項のタイプの違いによってその項の構造的具現化の可否を決めることを提案している。Brisson (1994) は Grimshaw (1993) の分析を Pustejovsky の event 構造の点から再分析し、項の具現化と event 構造の関係を明確に示しながら目的語の省略現象に説明を与えた点は興味深い。

Brisson (1994) の具体的な分析に移る前に、Brisson が分析の中心に据える Pustejovsky (1991) の event 構造の提案を概略しておく。Pustejovsky は、Vendler (1967) の英語動詞の4分類の分析を event structure という観点から再分析し、state (状態)、process (過程) そして、transition (移行) の3つをアスペクト的な素要素とみなし、それぞれを以下のように規定している。

本論文の提案でこの事実がどのように分析がなされるかに関しては今後の課題とする。

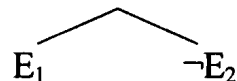
(26a) state



b. process



c. transition



(26a)の state は、人やモノの静止した状態を表すものであり、単一の subevent から成る。(26b)の process は、先行研究 (Vendler (1967), Dowty (1991)等) の activity に相当するもので、ある動作が変化なく (制約がなければ際限なく) 続く。この process も単一の出来事の反復であり、単一の subevent からなる。(26c)の transition は、accomplishment に相当するもので、行為がなされる subevent とその行為の結果生じる状態を示す subevent、つまり、(26b)の process を第1の subevent、(26a)の state を第2の subevent としてもつ複合的な event 構造を持っている⁶。例えば、destroy the city といった accomplishment の述語においては、ある動作(「都市を破壊する」という行為)がある一定期間なされることを示す event を第1の subevent として持ち、また、その結果としてある結果状態(「都市が破壊され廃虚となった」状態)に変化することを意味することを示す event を第2の subevent として持つ。一方、run のような activity の述語は、ある動作が際限なく続くので、1つの subevent の繰り返しである process として分析される。しかし、run to the station ように、run という出来事の終着点を表す副詞句が付加すると、変化主体の最終的な場所が含意され、process から transition の event structure へ鞍替えする。

また、Pustejovsky は、subevent は、必ず事象項(event argument)によって充足(saturation)されなければならないとする。つまり、state、process の event を満たすためには、必ず1つの項が、2つの subevent の複合である transition は、2つの項が必要とされる。

Brisson (1994) では、Pustejovsky の event structure と event saturation の観点から、Grimshaw (1993) の分析を再分析している。(23)の write のような動詞は非有界的な場合、(26b)のような process、有界的な場合、(26c)

⁶ van Hout (2000) は、Pustejovsky (1991) の event 構造をさらに発展させ、上記3つの subevent の他にも、process と transition を組み合わせた event 構造など Pustejovsky の3つの subevent を複合させた event 構造を提案している。

の transition を持つと仮定する。目的語の省略が可能な場合は、非有界的な述語、つまり、process の event template を持つこととなる。この template を充足するために必要な事象項は1つである。2つ目の項の出現は、event の充足のためには必要とされない。このため、目的語の省略が可能である。一方、有界的な解釈を持つ場合、2つの subevent から成る transition の event template を持つ。このため、event structure の充足には少なくとも2つの事象項が義務的に必要とされる。このため、目的語省略の可能性が排除される。

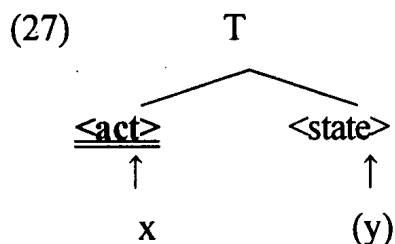
Brisson (1994) の分析は、Grimshaw の分析を event 構造という観点からどのような意味的要請によって目的語省略が阻止されるのかを even template の違いというより一般性の高い概念から導きだすことを可能にしたことは大変意義深い。しかし、Brisson の分析では、write の語彙構造を Process、transition の両方の template を本来的に持つとの仮定をせざるを得なく、ひとつの動詞に2つの template を仮定するという余剰性が残る。また、依然として、Grimshaw の主張する2つの argument のタイプに依拠しないと(23a)のような非有界の write が目的語をとる事実が説明できず、疑念が残る。

本論文では、以下の節で、Brisson の問題点を解消しうる形でこの分析を拡張し、1つの動詞に複数の event template を仮定せずにより自然に目的語省略の事実が説明できる分析を提示する⁷。

4.2. 分析

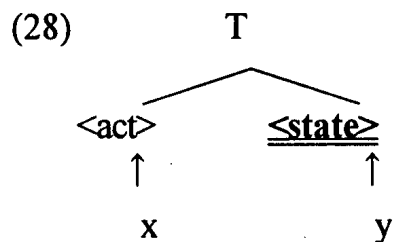
本論文では、write のような目的語の省略のできる有界性が中立である動詞は、Pustejovsky の3種類の event template のうち、transition を持つと仮定する。それぞれの文におけるアスペクトの指定は、event template のどの部分を顕在化(prominence)するかによってなされ、顕在化された subevent は、義務的に事象項(event 項)によって充足されなければならないと仮定する。(23a)のような非有界的なアスペクトを持つ write は、

<act>の subevent が顕在化し、その subevent を充足する要素が、event 構造では義務的に必要とされる。



一方、<state>の subevent は、顕在化されない。結果的に、process と同様の event template を持つことになり、<act>を充足するための事象項が event 構造で義務的に必要とされる。この要素のみ、義務的に統語部門に投射される。一方、顕在化されていない<state>の subevent であるが、event 構造においては、義務的に必要とされず、認可される必要がない。しかし、統語部門においては、この subevent に対応する項が具現化しても構わない。そのため、非有界の write は、目的語を随意的に選択する。

一方、(23b)のような有界的なアスペクトを持つ write は、<state>の部分が顕在化される⁸。



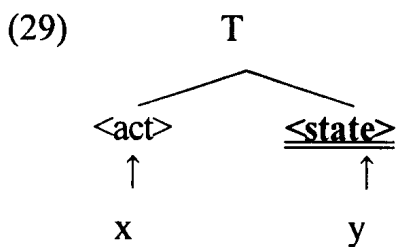
有界述語の write は transition の event template を持ち、また、第二の subevent

⁷ 同様の分析の可能性を示すものに Rappaport, Hovav and Levin (1998), Levin (1999) がある。これらの分析も本論文で中心的に論じた Brisson (1994) 等の分析と同様、目的語削除の現象を状態変化動詞の語彙構造から導き出すものである。

⁸ どちらの subevent を顕在化し、(27)と(28)のどちらの event template を使用するかは、目的語の種類（定か不定か）や述語に付加する副詞句等によって決められる。これらの要素がどのように subevent の顕在化に影響するかは重要な問題だが、本論文では深く議論しない。ここで必要なのは、どちらかの subevent の顕在化によって事象性の指定がなされ、統語構造に投射する項の違いが生じる点が重要である。

である<state>が、顕在化されている。(28)において、顕在化された<state>を充足する項と<state>の事態を引き起こす<act>の event を充足する項の2つが event structure において義務的に必要とされる。event 構造において義務的に認可された<state>を充足する項が統語構造にも反映されなければならないため、(23b)のような有界的な解釈をもつ目的語省略文は派生されない。

この分析から、なぜ、(24a)の melt のような状態変化動詞が目的語省略不可能であるのかについても自然な説明が与えられる。以下のように、melt は、transition の event structure を持ち、語彙的に既に<state>が顕在化されていると仮定する。



語彙的にあらかじめ指定された subevent の顕在化の変更は、不可能であると仮定すると、<state>を非顕在化して、y 項を省略するような操作は排除される。このため、melt では、必ず y 項の出現が要求され、目的語省略が不可能である事実が説明される⁹。

本節では、「たて」複合と同様にアスペクト中立述語が、ある特定の環境で用いられる際、文法的に必要とされる要素の存在を subevent の顕在化という概念を導入することでより自然な分析が可能であることをみた。次節では、本論文で提案する subevent の顕在化が「たて」複合の事実に適切な説明を与えることが可能であることを示す。

⁹ 管山 (2003) は、認知言語学的観点から、本論文と同じ現象を扱い、スキーマの profile の仕方によって状態変化動詞の目的語の非削除性が説明できるとしている。(状態変化動詞の中には目的語が削除されてもよい場合を指摘し、語彙論者の先行研究の問題点を指摘しているが、本質的には) 本論文とは枠組みが違うが、分析の方向性は軌を一にすると考えられる。

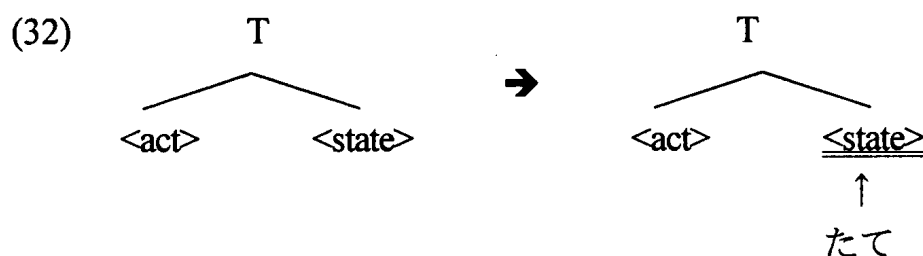
4.3. 「たて」複合と event template

前節では、event structure における subevent の顕在化の違いによって、義務的に必要とされる項の違いが説明できることをみた。本節では、上記の event structure を基にした分析をもとに、前節で観察した「たて」構文の事実がどのように分析されるか検討する。

2節で結論づけたように、「たて」構文が可能な述語とは、有界性が有界・非有界のどちらの解釈も可能であるような述語である。「たて」複合により、中立的であった述語から、有界的な性質を取り立て、さらに、その結果によって生じるものに焦点を当てることで成立するのが当該構文であると考えられる。以下が、前節までに観察した「たて」複合の例である。

- (30) a. しぼりたてのミルク
- b. とりたてのトマト
- (31) a. 揚げたてのコロッケ
- b. 焼きたてのパン

「たて」は、有界性が中立な述語に付属し、述語の記述する出来事の段階的な出来事の一部を取り立て、その段階における変化の様相を明らかにする表現である。<act>、<state>の subevent のうち、<act>の subevent を顕在化する英語の目的語の省略とは異なり、「たて」は、2つの subevent のうち、<state>の subevent を顕在化する役割を持つ形態素であると考えられる。「たて」複合の事実は、以下のように分析される。



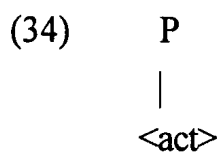
「たて」によって顕在化された<state>の subevent は、項が必要である。ここに義務的に現れる項が「たて」複合によって形成された修飾要素の

叙述の対象となる主要部名詞となる。また、<state>の subevent に生じる項は統語構造において、内項に当たる位置であることから、1節で述べた直接目的語のみが「たて」複合名詞句の主要部名詞になる事実にも自然な説明が与えられる。

この分析から、<act>しか event template に持たない以下のような、「たたく」のような他動詞や「笑う」のような自動詞が「たて」構文成立不可であることを観察した。

- (33) a. *たたきたての肩
b. *笑いたての赤ちゃん

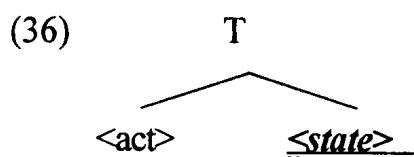
基体動詞「たたく」「笑う」は、(34)のような event 構造をもち、「たて」が顕在化させる<state>の subevent を持たない。このため、「たて」構文が生成されないと分析できる。



また、以下のような「壊す」のような状態変化動詞が「たて」複合できないことを観察した。(以下に再掲する。)

- (35) a. *壊したてのおもちゃ
b. *潰したての空き缶

この事実も、状態変化動詞が event 構造において、語彙的に<state>の顕在化が義務的である構造をもつと仮定する。



「たて」によって更なる顕在化の可能性が排除され、状態変化述語の「たて」複合ができないと分析される。

ここまでの分析から、英語では、*subevent* の顕在化は、コンテキストや目的語要素の定性、述語修飾要素によってなされるが、日本語の「たて」のような形態素は、*subevent* の顕在化を担う形態素であり、語彙的に指定された項構造、*event* 構造の指定に関与し、統語的に義務的に必要となる項の情報、述語のアスペクト的特徴を指定する役割を担っていることが分かる。

5. まとめ

本論文では、従来、あまり観察されてこなかった形態素「たて」の特徴を明らかにし、形態素の接合可能な述語に関する一般化を提出した。また、その一般化が単なる述語のタイプの違いだけではなく、述語のアスペクト的特徴といったより高次の意味概念から導きだされると結論づけた。

本論文では、英語の目的語省略の現象を *event* 構造の制約から導きだす Grimshaw (1993) や Brisson (1994) 等の分析を拡張し、*event* 構造内の *subevent* の顕在化の概念を導入することによって、先行研究の問題点を解決し、より自然な説明が与えられることを提案した。「たて」複合の事実も *subevent* の顕在化の概念によって説明されることを主張した。

本論文の主張する *event* 構造内の *subevent* の顕在化の分析が正しいとすると、顕在化に関わる要素に日英語の違いがあることが分かる。本論文で取り上げた日英語それぞれの構文は、いずれも述語の結果状態を焦点化するものであるが、英語の場合、その顕在化は特定の語彙要素によってなされるものではなく、語彙構造内の操作であると考えられる。一方、日本語の場合、「たて」複合の事実から、顕在化には、可視的な形態素が関わるということが分かる。つまり、英語と違って、*event* 構造内の *subevent* の顕在化は、結果の意味を担った特定の形態素が関わることになり、純粹に概念構造によるものなのか、形態構造によるものなのか判断が分かると考えられる。本論文が取り上げた以外の構文、例えば、以下のような結果構文や移動動詞の構文においても、結果の含意を付け

加える際、日本語は動詞の構造を複雑にする。

- (37) a. John hammered the metal flat.
b. *太郎が金属を薄くたたいた。
c. 太郎が金属を薄くたたき延ばした。
- (38) a. John ran to the station.
b. ?太郎が駅へ走った。
c. 太郎が駅へ走って行った。

このように、英語と違って日本語は、結果の含意は形態的要素によって表すことが知られているが、これらの構文を含めた形で、日本語における結果の焦点化と形態要素の関係を詳しく探ることが重要であり、本論文の提案した分析が(37)(38)の事実にも当てはまるかどうか考察することが、今後の課題である。

References

- Brisson, Christine. 1994. The licensing of unexpected objects in English verbs. *CLS* 30, 90-102.
- Burzio, Luigi. 1986. *Italian Syntax: A Government-binding approach*. Dordrecht: Reidel.
- Dowty, David. 1991. Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67, 547-619.
- Grimshaw, Jane. 1993. Semantic structure and semantic content in lexical representation. MS., Rutgers University.
- Grimshaw, Jane, and Stephan Vikner. 1993. Obligatory adjuncts and the structure of events. In eds., Reuland, E and Abraham, W. *Knowledge and Language II: Lexical and conceptual structure*, 143-155. Dordrecht: Kluwer.
- van Hout, Angeliek. 2000. Projection based on event structure, In eds, P. Coopman, M. Everaert and J. Grimshaw, *Lexical specification and insertion*, 403-428. Amsterdam: John Benjamins.

- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』 くろしお出版
- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」 『言語研究』 15 (金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』 (1976, むぎ書房) に再録)
- Levin, Beth. 1999. Objecthood: An Event structure perspective. *CLS* 35, 223-247.
- 森田良行. 1995. 『基礎日本語辞典』 角川書店.
- Pustejovsky, James. 1991. The Syntax of event structure, In eds., Levin, Beth & S. Pinker, *Lexical & Conceptual Semantics*, 47-81. Stanford, Cal.: CLSI
- Rappaportm Hovav, M. and Beth Levin. 1998. Building verb meanings. In eds., M. Butt and W. Geuder, *The Projection of arguments*, 97-134, Chicago, Ill: CSLI.
- 菅山謙正. 2003. 「状態変化他動詞の目的語は省略できないか? : event 構造と prominence からの考察」 『英語青年』 149(1), 53-55.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics and philosophy*. Ithaca, Mass.: Cornell University Press.

261-0014

千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

myamada@kanda.kuis.ac.jp